繪本豐臣勲功記 第九編十卷

繪本豐臣勲功記

九編

壹

へ遠13
2209
81

櫻澤堂山編輯
松川半山畫圖

繪本豊臣勲功記 九編

大阪書林 羣玉堂
文海堂

特
13
2209
81

豐臣氏九編

關白太政大臣豐臣秀吉公之像
風塵海内
轉茫々勿
焚蒼鬚猿
面郎悍決
自提三尺
劔回頭四
境眼炎涼
南洋幟賦

島津義久入道龍伯之像
蟠屈西海勢
堂々虎嘯龍
飛幾戰場一
見猿郎無氣
力却多拋劔
拂禪林

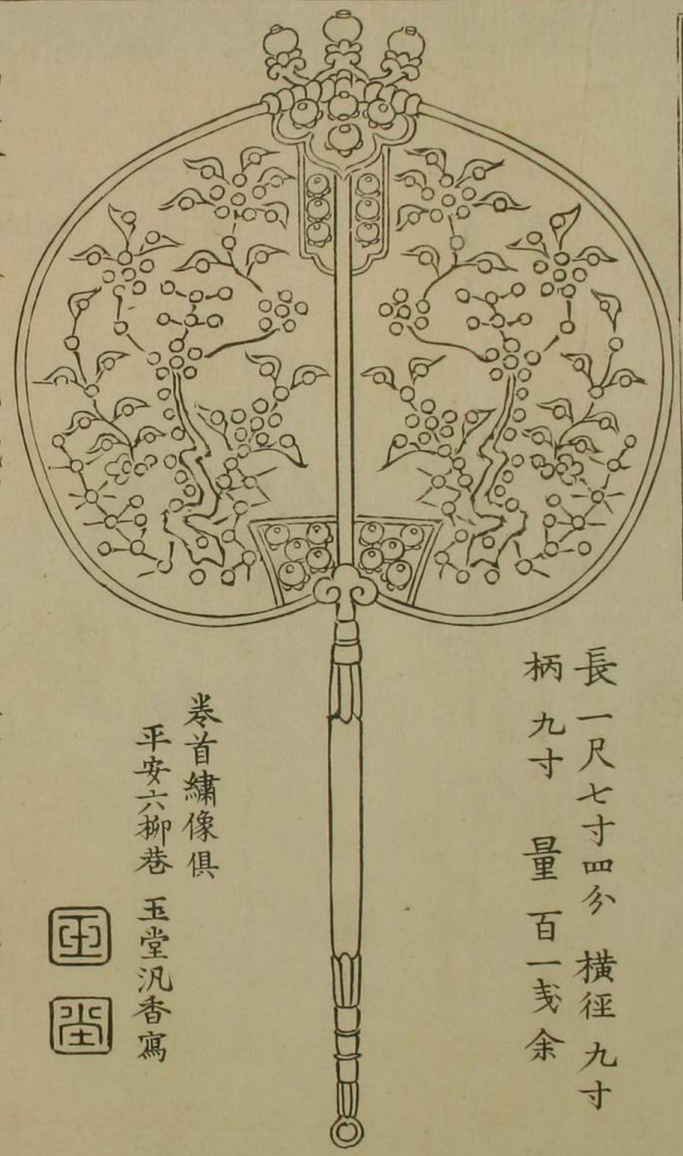
從三位宰相源義弘之像
將家將起
勢愈震
南國復看
馬援倫
海憂為田
寧負意
自題金柱
表精神

新納武藏守忠原之像
瞿然俊
傑獨龍
驤
頗與一
人軍勢
張
英主輩
擬降敵
日
手猶按
劍叱猿
郎

豐公遣物軍配扇之圖

京師大佛妙法院藏

長一尺七寸四分　横徑九寸
柄九寸　量百一匁余



柄及ヒ輪等黄金ニノ赤地ノ織物ヲ以テ團面ヲ張金絲ニテ唐花ヲ繡シ其葉上ニ各細粒ノ真珠ヲ綴ル中央并頭ニ大粒ノ真珠琦珀瑠璃ヲ綴ル

卷首繡像倶
平安六柳巷　玉堂汎香寫

繪本豐臣勲功記九編卷之壹

目録

秀吉公自幾内藤渡土州
附基次高察
谷忠兵衛涛夜欧却敵奪城
附大渓合戦

長曽我部信親大浜牢城
附山内落没
内府使庁桐市正従信親
附信親帰服

繪本豊臣勲功記九編卷之壹

櫻澤堂山　刪補
基次写察

秀吉公自発艨艟渡土佐　属

葬と折ことおもと如何。亟斧克セざ。然べ加茂を討取清正も。怪しくも背路より。焼山の城を襲撃。苦もなく一防の城所を攻拔。金子と孔冠の中を撃捉。潰別然谷と一脅を付セしへ。現を双びなき切なり。這図と猶さぞ土佐の國へ攻投べしと。演岩泥谷の苦楚と厭たべ。漸く土佐を近きくるが。茲小鬼里が波といふ城地あり。一里ばかり此方より。その要崖と望見るを。焼山城よも劣らざる。絶壁斷行の結搆なるべ。這一城をうづらふて。万卒の力と

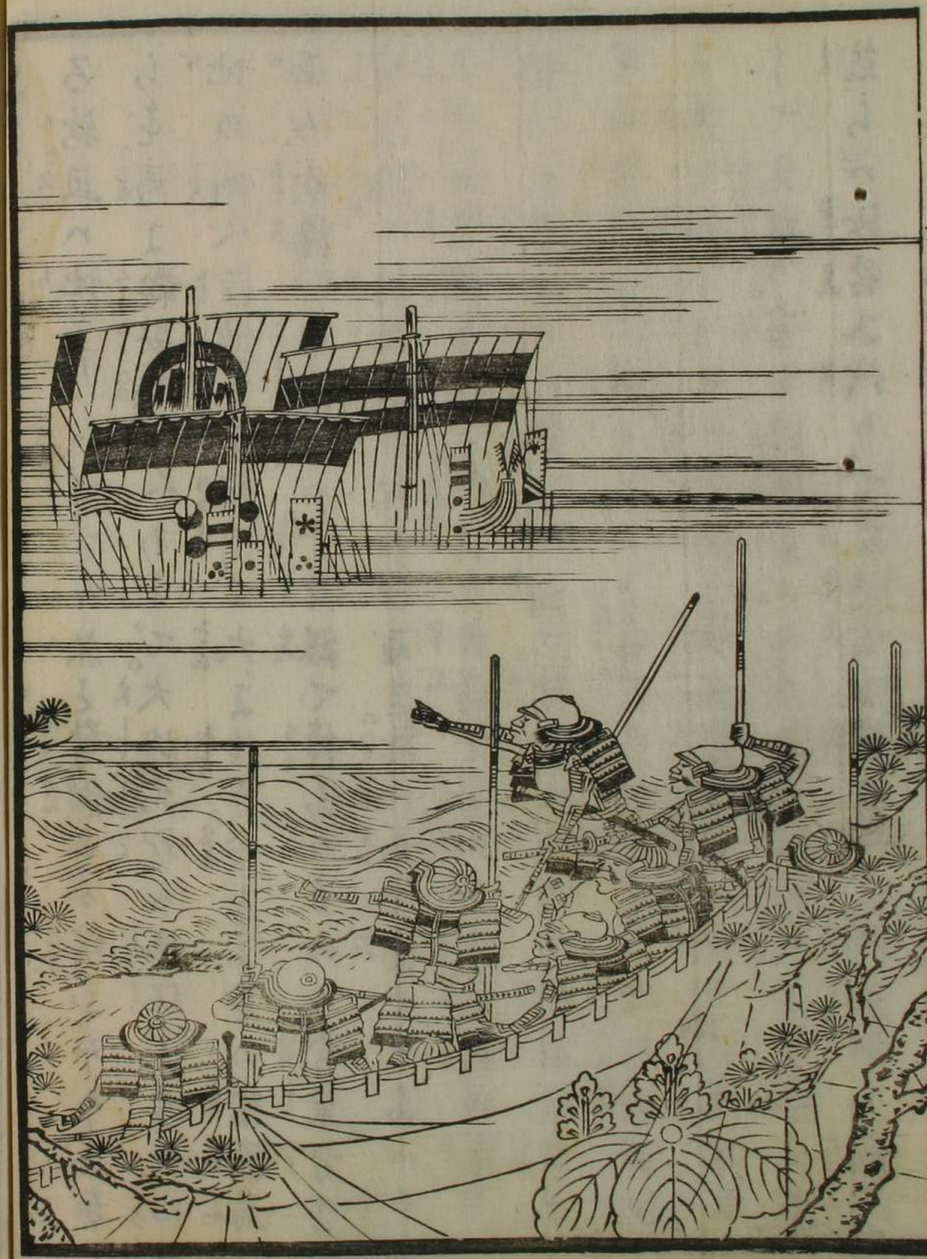
労せんより。別道より独向たんゝゝと。鋭卒をえらんで細作に出させ。いづゝの途ゝ伏冥やよゝゝんと。その消息を待ゝる由元。暫く軍ハ止りゝり。這胸に齒りて総大将羽柴内大臣秀吉公ハ泉別堺に出陣まし〳〵。四國の曉暗を試合セゐふ。浩る所に諸方の注伸。日く勝利を報きゝる。中に能ても豫及の方ある。加茂小早川が陣より八。組馬舞舟亀宮の如く。晩日ハ松山今日ハ燒山。次第去ひ水攻陥して。伊豫一國と速くも平治し。翌日ハ土別に乱入もべふ。亀亀施て注伸を。内府をべゝゝ四國の絵図を採出し。進退遠近浮失等。志だ〳〵地理を是ふしさまひ。然ば今より紀別に趣き。南海上を推渡し。ぶち

に土別へ乱入して。元親が偏執と拒ゞん。毛軍伐にとて五日。加田の浦浜ハ薩藤数千を伐らセ安ゝるが。迷時ハ鑑舟ハさしめよと。九鬼大隅守と舟奉行とし。齒天い天正十三年乙酉七月廿三日。堺の津を進発〳〵ふ。供奉しまわゝを個ゝに八。福治左衛つ太丈正幼。氏桐東市正旦元。加茂左馬丞赤明服。坂中務太浦康治。平聖遠江守長恭。猶谷内脇正義別。姫尾帯刀先生右晴。生駒甚左衛つ祝世。筒井伊賀守定次。長岡改宮山右近長房。赤松弥三郎別村。神子田宋左衛つ通清。中村式部丞女浦一氏。佐治軍を行ハ。大谷刑部丞女浦右隆。前田徳善院法印玄以。長束大蔵丞女浦正家。此侍の軍勢十

三万餘騎。おの〳〵纜解弃くく。湯の浦より乗るもあり。日の沖より出るもあり。内府ハ紀州の加田浦より。数千艘ゑ正帆張らせ。南海上へ乗出せ。然るゑ紅盃九皂大隅守義隆ハ。最も紅軍ゑ熟練しゝるゑ。金張赤白の采幣掉採波間ゑ指揮を傳ふること。さゑ〳〵陸地を行ゞおとく。殊ゑ当日ハ波濤おゞやゝゑ。一艘軍艘もつゞかゑく。秀吉ハ御方の勢ハ。土別大濱南濱より岩屋しゑひ。赤一方ハ姫尾吉晴を大将として。這隊の名紅三百餘艘。甲の浦ゑ岩と等しく。郷邑村里を放火ゑし。小堡扶寨のえゝゑ。ゑく。紛〳〵として攻逼る。四國勢ハ浩りゝる。火急の進名あるおとの意憶ざる変ありゝるゑ。這故天より降雪ゝる

る欲。且ハ地よりや沸さる欲と。弩傾さる繻おゝゝさゑゝ。馬ゑ鞍安服さへあゝで。大将元祝ゞ出張しゝる。白地の城へ注伸を元祝听て大ゑ猿き命ゑゝゝぞの猪冠者面ゞ。南海を推渉しハ。一舟絡て後あるものゝ。今東方ゑ守名敷し。偏柱石とたのむ屋き。九名を奈を。一大平の災禍ありと。秋喪九名清を呂出し。汝を祝の雪ゑ乗ゞて。裏ゑ一の宮へ他向ひ。信祝ゑ代りて彼ゑを守を。その方秋とハ斯くせよと。言葉めて告しゝり。秋喪直地ゑ馬を跳らせて。一の宮ある信祝ゞ陳ゑ到り。折箱を出しして元祝ゞ。言を伝祝ゑし。しゝるゑそ。信祝大ゑ弩患ゑし。然らバ汝名ゑ代りて。這陣営を守るべし。我本國ゑ他返

秀吉公の
大軍加田の
浦より出帆
南海を推
渉て土州に発せ



て。速地ふ秀吉を戴ふをべーと。まづ城中へ此事を伴ふ
稟送り。後の事共子弟ふ命じて。信秋こづゝの名士を從
え。白地ふ行て父元秋ふ對面ふし。軍議を陳じ這隊の勢
を。一子又百有餘人率從え土別大溪出て退返を。佐又一
の文の城外ふハ。黒田を組め這方の佐將軍議日く拔く
ふして。迎ふ城を踏まべき。方役を工夫ふしゝるゞ。其ゞ
中ふも後爰又名糸基次ハ。射櫓ふ登り曉るより。著る紀
まで目も離さず。敵の蹤跡を双方城中の敵城外の陣等しく
窺在るゞ。今日後逼の信秋ゞ陣中の相を觀察るふ。事
昨日ふ變じさをべ。まをゝ意ふ莊しふ思ひ。工夫を凝
して左るゞ所ふ。茂吉之助傍座より。基次ゞ袂を牽足下

斯まで何とゝ祝ふふ。故陣ふ變ありやと。汎ふ又名清ゝ
ち點頭。足下も快と信秋ゞ。陣の虛實を窺觀せよ。昨日ま
でハ十分ふ。陽氣沖て天を衝しゞ。今日太陰翳ゝ。ま〻
ともつて外陣と城内とを窺ふ。城内の氣ハ沈で
強く。城外の氣ハ浮で弱し。惟て名事心孔を一致せざ
るハ。正ふ是伝祝こゝふ在ざるべーといふふ。茂いよ
いよ憤り。其ハ又いゝたる賢慮ふや。然ひ君いまゞその
穀ハ所ぞといへども。日數をもて推を刻ハ。秀吉之南海
より。土別へ孔入しふ頃ありまをゞさめふ敵將元秋
おきを禦防の大將ふゝをゞ信秋をもて本國へ呼返し。
此陣中ふハ代將を容。信秋の旋ハそのまゝふして。進名

とあざむく計策あるうん。故將ふぐるも信親ハ。最もおそる〳〵名士さり。其將陣ヨ在ざきバ。法士の意も撰るるものあり。這故をもて外陣の故のゑよいくふんぬべーと。説きて莫ハ感嘆ふー。撿ふ〳〵祢寅俺們ゲ追ぶまゞき所あり。然もる時ハ進退いうん。然べこそ主人とさゝめて。まづ外陣と乗捉べーとて。後爰莫と一備ふ。黒田孝高の爰ふ出。伝祝退去セー綽と。つむゝふ演説しりるふぞ。孝高大ふ歓説ミ。さゝバ速ハふ准備セよとて。黒田の勇士三千餘人減と伝て推進ゝり。おきを発るゝり蜂須賀爰生姫仙石。一柳倚さゲひヨ懋でこきもくと。総勢一途ヨ攻進りるゲ。後爰ゲ飼むふーりゝぞ。伝祝の陣一時ヨ放きて。右撲左撲ヨ散乱ミ。秋庚九兵清麟とされども。その功さゝふあゝざきバ。憾念ふゲゝ牽退く。黒田の勇士最励ーく。退逼〳〵攻爰りる田元。秋庚武勇ありといへども。半途ヨ爰得る事あさぞ。白地の城へ退きりる。進兵の総勢そのまゝふ。兵士を激ーて警然と。一の宍の城へ推進四方より推捉囲ミ。攻紀るふと烈火の如く。然ども要害険窄ふーて。守將い名ふあふ谷。江村鉋矢を惜まぞ防戦ーりきバ。進兵い徒ふ損るのミ。右左ヨ遏日も晡天とるきバ。軍を收めて廠兵を補妻其扶列將舎集ーて。軍の評議ふ迫ぶ援舎ゝ。五十嵐内匠来爰セり。幷も今爰十嵐ゲ来りゝ爰ふ渭い。加爰清正事を儀らひ。一の

文の故將として。降らしめんがさめよゝ内匠ハ直地
ゝ秀長卿の陣ゝ入来し。佐士と得て清正が。折箱と披露
ゝ迎ぶきさり。秀長々邦地ゝ内匠と昭容らゝ。對面おつ
て言セらるゆう。某方ゝ正ゝ日清正ゝ降り。恥とおのんで
元祝の命と助ん忠信ハ預て主計氏が若ゝして承所ぬ。
検ゝ特もゝき勇士あり。某方が忠志ゝめでゝ。長男我敬
が泉ハ絶さゝゝむべし。且又這般内府土別へ。御進発ゝ
ゝと聆清正ゝ死ふて君方ゝ来り。一の文の城將を説喩
さんとのまゝろざゝ。いよゝ賢き料理あり。清正も心
よゝ許して。内匠と這方へ出セゝ。渠一個の切とおも
ちゞ。いさゝとるて俺们ゝ懐るハ。大張といひつべゝ。

這等の旨とよゝ意得城中ゝ到りゝば。平天下を持一ゝ
して。谷汪村と説ゝとて。ゝ十蔵を城中へ出ゝ。時
ゝ城將谷忠名清ハ。ゝ十蔵が来ると聆て。勃然として憤
怒を発ゝ。怕き内匠が動拳ゝ。不忠不義の俄足らぞゝ
て。茲ゝ来るハゝ面目ぞ。一言の下ゝ誓殺して。不忠の
罪と礼をべゝと。怒気憤怒ゝあゝハて。歯を切ゝきつ
とおろへゝ十義ハ結こゝと。忠名清が弟ゝ来るを者より。
礙と眺で声をあゝらげ。面ハ人ゝ似ゝうといへども。心
ハ狐狼ゝ劣る不義者。阿容こゝとよく生面さげ。いろ
ある言を云ちんとて。君面前へ来りゝぞ。個く内匠ゝ索
羅て。君の許へ送ら出よと。敦圍く拷揮をるを。ゝ十義

ハ些とも動ゼざ。吳下ゞ怒も理ホ也ども。君言とホろも一ゑハ。聆て其理ホ稱セざべ。牛裂ヨセ〻ろ〻とも。心中ろて怨ホし。君ヨ彼ヨ活根ら也。唯死ヨ望めど清正許さざ。天下の至理と不理とヨ況て其分羽柴家ホ自荷擔セべ。元親いろホろヨあり〻とも本紀安途〻とゞふべ〻〻ざ。某方一個の心ホ因て。主君の存亡分明ホ有〻と。理解の節〻乃理ホ嘔へり。最も這勢ホ迫ざざるさに。石田三成使者〻〻し時。足下と君と主君ヨ孫め。和平の詞ヨ勧ら〻〻ども。主君听容ホ〻〻し也。君の心の隨ヨ任せて。合戦ヨハ迫ゞり。然ホ〻ろ古とのあり〻とも。降案セ〻とホハ〻ざヨども。國家の存亡ヨ察微ろる也。此ヨ

来りて足下と評議し。主君ヨ勧めて秀吉ヨ。和ヨ求めんと思ふホり。今ハ既滿ヨ奔。家長久の計策ヨ続らさるべふ然るべし。此ヨ調成う〻ホして。君首ヨ刎ら也よ。然されバ乃士恨もホく。愉快死ヨ遂べしと泪ヨ流して述らる也ども。忠兵清心ホ疑惑ヨ懐き。汝いろホど毎ヨ振ふて歌〻んとヨとも。いろでろ君ヨ欺得べき。二の句ヨ聆ホ迫ゞと。速地ホ内匿ヨ郷て人質曲海へホ也ヨ竜玉忠兵清法士ヨ爲ふていふ中〻。又十蔵城中ホ在〻ちハ。故將宴で心ヨ容し。陣の使仗も点るべ〻也バ。今宵祝撃し故兵ヨ退散し。主君御父子ヨ力ヨ勧せん。快准使セよ兵軍とて江村ヨ、ハ城ヨ守らセ。精兵勝て又百餘人雲

出せ。時刻ハ子の上刻と。沫唾を呑で待在さり

谷忠兵清殿却被奪城　屬　大浪合戦

義を疑て疑を助く。智策見バ癡と生ず。谷忠兵清ガ義を疑て。却て甚身を亡こそ。是金吾内府の武徳ふ帰する所ぞ。然ハどふ上方の徒大将ハ又十万内匹を城中へ出ハし。其後ふ一て評議ある。眄る大将秀長の言く。七霄又十蔵ガ理解によりて。城将伏もべきもの欲河調たバ四國の平均ぶきふありといふ〳〵ども。多くハ城能しがとろうんと。聆て孝宮儕を進ず。検ふ〳〵令理ふ商もり。城将谷忠兵清ハ勇烈火の如ク一て。又十万ガ理ふ伏もねど。然れバ今宵ハ大持の境ありぞ。ぞ欲

撃の投るあとあ〳〵ん。各准備ふ〳〵ふべし。其方術をバ斯斯と。諜合セるるハどク。徒将現ふもと同兵ふ一て。自己くくガ陣厨ふ退て。密ク徒隊を殺けり。斯とも知ぞ谷忠兵清。時稍青中を亡るるころ。射樓ク出り敵陣の相を熟〳〵視て行るク。徒方の篝燎次第ク暗く陣く敵急ガちあるるをバ。然ェや時こそ至〳〵れ。声を呑で推出もべし。蓮漏の声の沈〳〵と。子の刻と。打出を。眄と共ク谷忠兵清。乃百騎人の猛兵を率し。城門冠ラセ推出し。山を下りて坂際ふ。孤仗を設ラし。峰須賀ガ。正中央の大隊仗へ。喊を作りて殺投を。峰須賀青の勇士徒率。須て将命を義りるるもえ。慌忙く無ど秀セ。八方十面へ散乱を忠兵清お

おひ不覺起。苦もなく一陣を征破り獲て爰ぞ隊伍不突投縱横無方と逐崩し。黒田ゞ陣所堀一柳ゞ隊伍まで力も労せず捲来れも進んで行先へ見参長ゞ本陣あり。先努めよと激声一喝吐と嗔て突投しるゞ。斯へいぶろしや陣中不敵一人もあらざりをべ。忠吾清吉をへとうち弱き。逐返さんとする足底不。多院一声呵くとひとしく。おをと嗜号とかしくりん。四方一変不誠を仮て。仙石田中小西ゞ軍勢遠迫ゴ多院撃連怒潮の如く紀り立忠吾清おひ不驚傾ふし。佐へ敵将をやくも繁て。ゑをと羅るの罠を役けつるものゝ。噫抗憾やと取て返し。一方を吹嶺り。城中へ退入らんとを路を塞ひで

黒田の勇士後援。栗山。毋里芸侯と相断。各ゞ名士と一足も通さセず。西ゴ奏を べ峰須賀惣東ゴ遊をべ城へ向てい半蹄も。容させず。と防ぐとのへども。忠吾清まゝぞと死憤を究め。突おどゝ誓おどゝ。辛くも一條の活路を開き。城つ弟へ弛吾て ちゝを開よと呼をべ。江村伯後守清を諜の上ゝ露出。各忠吾清さゝゝゝ聆。汝い吾ゝも悪きゝも。彼将ゝ彈交るをとふく。我意を振ふて條人を蔑し。主君の危急ゴ心も吾ゝ。却て汝ゞ忠義立い主家を亡を端ををべ。俺们汝の出るを待て。主君のさめゝ降参ゝ。元親父子の御命を助ゝんをとを料理ゝり。先非を悔む意ゝ。汝も羽柴家ゝ降るべーと。大

者声を呑まるゝ。谷忠兵清蒔果城を睨居たるとは
ろへ。上方勢退遁来り。徴然として突て蒐る。谷ゞの百の
勇兵率乱拉しる撥舎を出び。戦ふこさへ途惑ふて殘
女子ふ殿をゝ。忠兵清乗朔をゝ。唯一騎欲地
と脱出。白地を目て敗走を。降須賀勢遁をまゞと。白地迫
く退る所ふ先達て一の子を敗走しる。秋表九兵清
城外ふ結陣しるゞ。斬と走るゝ頻ふ指揮ふし。谷と
敵をふ救へとて。自勢を率て撃て出。降須賀勢を退退け。
忠兵清と伴ふて呂陣中へ引ゞ客戦労を慰めて後秋表
谷ゝうち伴て白地の城ふ投ゞゝ。元親古ゝ〳〵の敗軍
ゝ。漸く意拉をるゝふや。今ハ白地の宰城も。快ゝ〳〵ざる

車ありと襲彼の防軍細川源左ふつをも呑退らせ。土佐
一國へ自軍を纏結。秀吉を撃捉んと。急仗をもつて細川
を。白地まで退取らせ。這地も大持の要害ふゝ。大ゝを
計ひ。大名坂指陣飯倉徒次兵清の。三将をもつて這城を
守らせ一万ふの勢を殘し。元親その身ハ細川侍の佐
将を陸ゝ。土別を目て牽退く。斬て名一の実ふハ江村伯
後守城を死て。秀長秀次両々を迎へまゝ〳〵せ。ふ十義一
弁言を共ふ。主人元親父子の身を待くもさのゝるゝ
ふそ。最も祢姫の寄ありとて。紙の紛ふ皆鞍安吉光の太
刀ふ黄金百ゝ。古ゝを江村ふ贈へゝ。中ふも五十義内
返ゞ切ハ。辯ふ抜しを廣太ありと。鞍光の馬ふ長光の太

刀黄金百両を賜りかとゝ。内匠ハ泪を潸〻と流し。呼吸
心や臣の身として。君を斟り主人の安危の知もざる先
ヨ。御褒賞ヨ関るかと。大ざ悦る所あり。乃士降参つゝま
つるかと。単ハ主君を懐ふのゝ。然あるべとて煽烷を。辞
ゝもふもハ云礼ハ忘もどゝも。這義ハ単ヨ御免あるとゝ。匂と
決して承ざるハ。両卿を叡め佐将勇士も。感涙ハ膝を漂
ハセけり。然らバ四國平均の后褒賞と心ヨ任をべし。這
上ハ伊豫ハ辞返り。一の宮落城の趣を。法正ヨ告らるよ
と。拓鎗を紀書摺さるゝるバ。又十義内匠傾絆別辞もふ
して豫列へ返りぬ是より赤〻黒田峰須賀倚を呼集ら
ゝ軍の評議あり〻る而ハ。まづ白地を攻隔て后。土列ハ

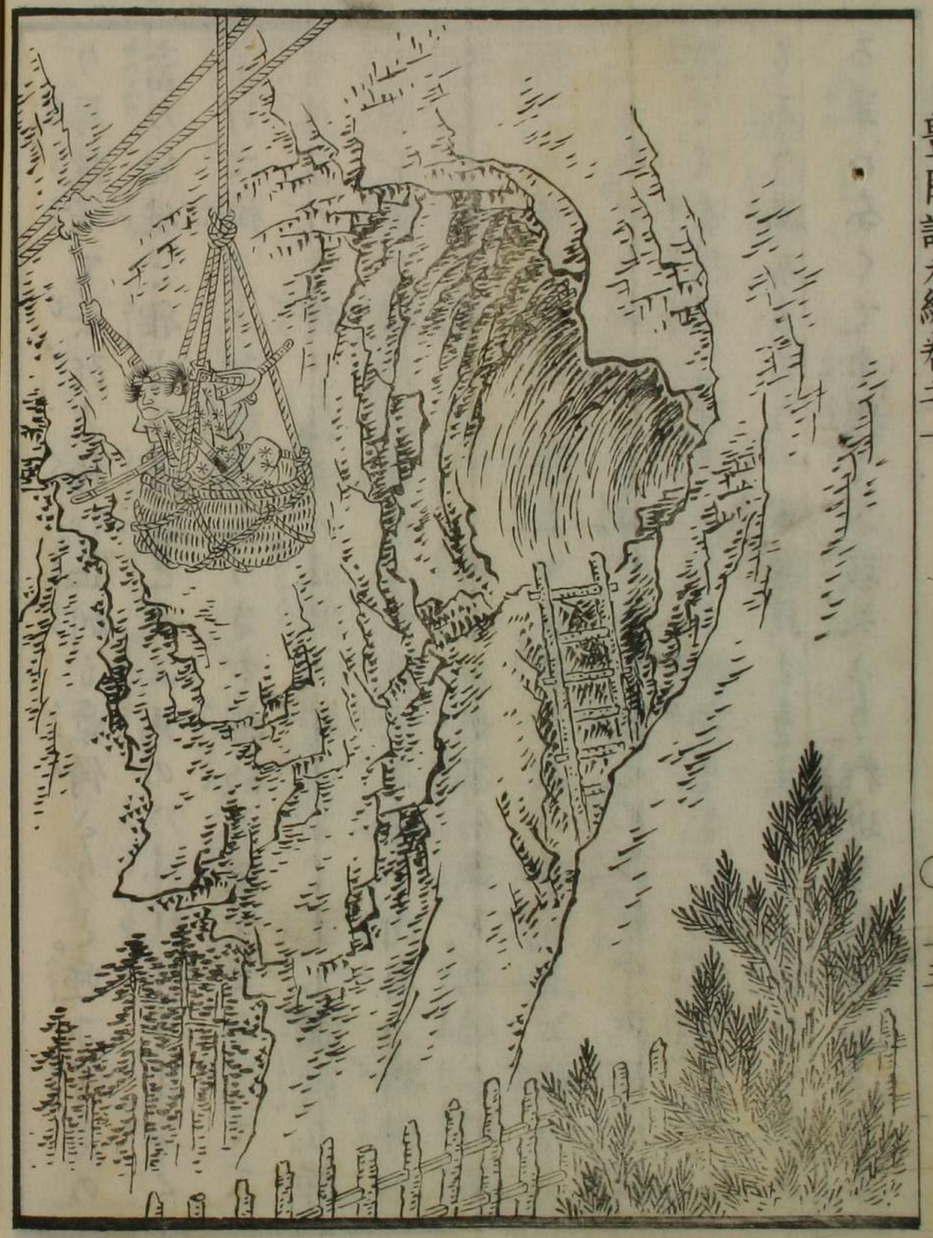
乱入をべしとて。黒田ともつて先陣とハし。白地の城へ
推進さり。開も這城地ハ宮山ハして。巖石峩〻として天
を掠め。怪樹森〻と雲霧ヨ緘で。殊ハ堅牢の城廓なるバ。
元親ハもまで本城の如く。安然として牢居〻り。ハを
ハ用て義百万猪勇を振ふて攻るとも。容易隔べき相も
者ハ。博て娘倉大黒ハ。術を尽して防ぎ〻るもえ。
了得の黒田も攻徑ゝ。城を眺で磐ゆる而ハ。濱波ハ向し
浮田党も。細川源左衛つと撃破て。同じく白地ハ純集り。
激原といふ而ハ陣を。然バ阿波伊豫濱彼の中ハ。法城殘
らぜ攻隔して。土佐場ある白地の城のゝ。獨立るの今
とあり。土列もつとも危急ハとも。元祝ハを嶮嶇と

さのんで。更ゝ屈さる気色なし。開も土列の國敵と謂へ。横窓々をども縦長きこと百里を出像及阿及ハ泥境と
をど。僕列よりハ二十條山の嶮関あり。名阿波路より入
らんゝハ。二條の外通ぞる途なし。伊豫ハ土列ゝ傍らる
國也え。通路おまさあるとも。防禦もつとも嚴密ゝを
べ。了得ゝ智勇の清正隆景。玉焼ゝして進得ぞ。吉川も名
久我ゞ。退らる跡の一陣と。棄ふらるのゝ切ぞる術なく。
佐方の軍と試合在さり。浩る所へ又十義内匠。秀長卿の
沛帖と提へ。加義ゞ陣ゝ返り来て。一の策の始終と。備ゝ
彈り所えらるゝ也え。ゝ十義ゞ挙動と。或ハ欲びあるひハ
感ゞ。斯てハ這地ゝ粗強しゞさし。内府の後逼延引せば。

山谷の疑所ゝて。苦戦しゝゝるんも計ゞさし。先や此地ゝ
ハ守会を止め。新濵口より土佐へ独投。君の郷助と做し
まゝ〳〵せんと。澄京ゝも強交して。両勢二万三千條綺勢
濵商て奮発せり。義ゝ長号我勢掃部頭ハ。先日阿及大麻
山の合戦ゝ疲を被り。山内の城ゝ入て。保養ゝ数日を経
しらるゞ。漸く痩も癒らる所ゝ。内府南海を推渡りて。土
別へ乱入さると聆取もの〳〵取あへぞ。自勢一千條人を
率し。大濵の本城ゝ独返り。城代依忌式部輔。石谷帯刀と
ゝと強し。弱丸と山の内の城へ移し。其身ハ三濵治部右
清つ。堅中森ハを率陸え。一万條綺の軍勢ゝて。南海へ独
向ふ。然ゝどゝ内大臣秀吉公ハ。其勢十三万有條人南海

より上陸しまひ。大濱の坤細路へ推出し。足場冨く〳〵ぬ所へ燒起。山と濤谷と臨く。隊列便利と陣所と設け。然して福島正則と先陣と命屬らる。大濱の城へ向たせさて。二番へ加藤左馬介。三番へ戸桐市正。四番へ脇坂中務次第と打て推進る。先進福島正則へ又小篠人を率隨え。南の坂より登る所ゑ長曾我部掃部頭離を作りて純迫く。福島大ゑ森繞く。〳〵づく〳〵正斜ゑ進出。破陣の如き大吉声ゑて。四國ゑ改撃摧憚の軍。耳傾ろて諦聽内大臣秀吉公の自内ゑおひて。冦神と号たる。福島左濤つ太夫正則なるぞ。宵さるへ今日ゲ始てあ〳〵ん。去来やカの程と試せんと。長戟採て孔電の像く揮廻し。掃部頭ゲ陣中へ。施風とだろり掛て投るバ。吁大將ゑ劣るゑとて。桂市名濤。吉村吉左濤つ。大橋義十郎犬崎去蕃。可児才藏吉田吉九郎紀川九郎造などいふ猛士。ゑ先狂んと斬て蒐る。掃部頭大ゑ怒り。惜くも諸る正則ろ来。其首抜て術辣と見せんと。是も正斜ゑ進んぐり。左来つ太夫ますます気燥。唯一棚ゑと突〳〵ると。掃部も名宮き猛將ゑ。ベ。ま〳〵と当途と挑合て。勝敗さ〳〵ゑ分得ぞ。浩るとあろへ二番隊ゲ加藤左馬介。明三子篠濤と斜行ゑ操出し。横隙より突て蒐る。左右と助る勇士ゑハ。藪白三右濤つ。川村権左濤つ。ま〳〵三番隊の戸桐。脇坂両勢六子余騎と。もて。後と斷んと純蒐る。古ゑ〳〵とめゑ土佐方ハ。一万余

人ありどもく。大ふ乱をして右往左往し。倭僧ふ崩蒐るを。掃部頭鱗斎をふし。四尺二寸の太刀揮繞し。ふ面方角当るとすると。自方を懋ま。砍若接起。此地を退ひて何ぞへ回くぞ。逃るとも外ふ逃ふし。死び潔ふ戦死せよと。呼りく。次て廻をび。三浜治部大清つ。陣中森八郎大将を撃をまゝと。翼とふつて補戦ふし。端ふく福島ふ対燕を。三浜陣中のぞむとおろと。除とふゝべて掛て蒐ると。吉村吉右衛門。可児才造馬弟ふ遮えて三浜陣中ふ楪合。掃部頭ハ蓼地ふ。再び正纫ふ斬蒐。激水烈火の猛威と敗し。ふ雲時ゞ布どハ戦ひ乱をども。掃部ようゝやく渡をとるふや。逐ふ太刀を撃落さを。身を沈ませて除尖潜り馬探傍て云ひと拝む。正纫も意得ようと。逐ふ渾身の奮力を。統と腰とふ張逼をび。両馬の八蹄悟得ぞ。攘早くじけて倒ろゝを。福島ようさぞ掃部の頭を力ふ信せて牽ふ。ふゞゝ。桂と落をび正纫ハ。苦もふく上ふ踏跨り。掃部頭を捉て壓得活捉ふして従士ふ命じ。内府の御陣へ飛を。再び馬ふ乗跨り。長号我部掃部頭を。福島正纫活捉ようゝ。殘る兵士ハ降参セよ。然されば栄死身を安ようしめん。いろふくと呼ハるを聆て。三浜陣中の両人力撓ミて吉村桂ふ撃をようゝ。土佐勢まをく猥軽走逃るもあり降るもあり。一万余騎ときまえしも。進兵を遮ふる牽ふふくて。貪殘くふ散失ようゝ。粧進まんとふゝる



土佐の国大
濱根元
城の要崖
危路を
往来する

げ。日色西天に沈まんとする也え。軍を收退佐幸と号ひ。暁なバ大淀へ推進んと。夜を守るおと嚴ふりね。佐も土佐方の兵章ハ。大将を活捉ら撃殘されさる疲弊者。幸ふ〻て大淀の城ふ退去き。此上ハ主や本城へ故と引支存亡を。究むべ〻と朝を覓し城中ふおそ對凝守ぬ

長号我弟信親大淀牢城　属　山内落没

卵ふ者と驚との。兵別ハおもども。愛石ふ投ぎれハ。いづもら固きさとを得んや。开も此大淀の城と渭ハ。中ふ九の曲堅あり。外ふ七重の石畳を重ね。天守ハ碧の雲ふ聳え。壕ハ緑水湍くとして。底と見るふ糸も及ぎど。是元親の源城ふ〻て。国中第一の要涯ふもバ。幾百万騎攻進るとも怖べきふあ〻じとて。各號で待とおろえ。信親父の命ふ因て。阿波一の宮を退去ふ〻。大淀の城ふ到ら〻ろもバ。弦將まを〻欽び繞ら。掃部の車を品彈り。出戰のゆを勧めりるふぞ。信親威儀を摳らひ。実ふ我もし〻も稟〻〻り。吾ふ秀吉を對故として。我ちんおとハ年来堅む所ふもども。最ハ計儀と先として。合戦と後ふセぞんバ稱ふべ〻ぞ。斯科理ひバ故ふ臆もるやう〻ふもども。個〻然の〻思れそ。総て軍と発ちんふハ。まづその位と察徴て。然〻て后ふ戦ふべ〻。是ふ其隊の大將さるもの。猿て知らる〻所ふもども。変化ふ臨〻て己矢おか〻。是其陣の布相と。隊伍の進退虚実ふおの〻て。旗の動靡

囲合筆熟覧セざる所あるゆえ。故を取おとゝ多ふし。亦牢城ふも心掩を賢ふをべし。斯る山方の要崖ふハ。断崖竪堅塹潛穴。あるひハ囲道悄路程。堞ふハ射窓の傍相あり。一二の柵の浮流を撰ミ。麝橋ふ囲大圓。鹿堞虎落の結相且亦迫地の城構ハ。甲丸乙丸三廓張丸の結船壕射窓。寒誓土障のふ姫柝塀長樓宮楼蔀の囲相邸屋掩ハ三重ふ繞らし。又壇の築塀二重構囲塹土堤の築相。おとらハ総て将くの掩意所ふをども。稍迫ざる隈あるとゝもて。故と取の慈とをゞ。その本ハ是将卒の心同じく和セざれバ。大将ハ仁をもふして。狹卒をあるとゝ慈しミ。狹卒ハ義を賢ふして。岐心ふく防戦ふさバ。百戦クふゝ

ぞ百勝を。今秀吉の所行を考るふ。よく此道を守るゞ四方ふ。幕下の将卒仁義ふ感じて。足手の働く進退をふをべ。天下ふ欲もる者をくふし。此欲をいる目的ふ引對尋者の戦ひセバ。自方いろふど強しといふとも。百戦のうち一度も利ふし。各ふをゝの理を察し。智を先ふして勇を後ふセゝるべしと。孫理明白ふ述ゝをべ。佐士群卒ふいるまで。膳を倒して感服ふし。這者ふゝバ二ふき。余を奔んも惜ゝゝゞと。貪同和して籠城せんと。一心をもまた策励セり。実ふ信祝ハ年牧卑き大将ふをども。智仁勇義ふ缺ことふき。会双の名士と謂つべし。況ふ大濱へ信祝ゞ。牢城セしことを傳聆。他集る四國衆ふハ。依ふ尤

京亮南呂九呂清。石谷呂紀。中内源呂清。光富權之助。菊地左衛門尉兵部。福富兎彌守。吉田次郎左衛門清おの〳〵棄内猪一ろをば。烟徑困乃を攻ぜく。そを大濱ゑ帰襃り。六万余人の勢を得さう。それむろうろハ呂雅金銀。子会万廩ゑ充満し。矢鉋土石ハ百年の約あり。薪水もまゝ山ゑ溢て。ゑゑくれ之しき物もゑし。伝祝おごそろゑ指揮をつさへて。防禦の備ゑ虚隙ゑく。敵進氷らば微塵ゑやんと。拳拙て待蒐さう。斯て又内府秀吉ハ。南濱ゑ本陣を居ゑひ。進むべき道あしき所ハ。土塁を入て溪河を塞め。山を抜谷を囲め。石を畳を橋を渡し。大濱近く隊伍を擬倚城の山方ゑ子軍境を懸るあと。数十筒或ハ井櫓を言く組拵。古を昇りて。城中の相を流視めゑひ。其後本陣へ法將を集め。内府命出らを之るゆう。意惜き長号我勢ゞ挙止ろゑ。這城ぶきへの堅牢ある古と力をもつて攻るとも。容易ゑ陷べき城ゑあらむ。まづ這城ハ囲て。山内言知甚外甲の浦の海辺より。総墓ゑてきびしく攻ゑば。半ハ降参仮彼をべし。然まれば法方の途閉けて。三ケ國の自方の軍勢。性来自中あんぬべし。時て大將元親ハ。大西白地ゑ立ろをば。本國へ帰らざる先ゑ。通路を断裁古そうろを。快く隊紙セ〳〵ふべしとて。言知山内の進軍ゑハ。生約甚左衛ゑ。長岡与一郎。山内猪右清ゑ。赤松弥三郎。大谷邢部女輔侍三万餘騎甲の浦の本道より

厄桐市
濱の城
使者と
勇矣
能信
說
正大
中ゐ
凜諭
親ど
落ち

ハ。平堅遠江守糟谷内膳正倅一万余騎ヲ以て絶向たせ。大
須の攻隊ハ瓶の如く。福島。加藤。片桐。服部。古田ヲ筋井来
山。神子田軍監ヲハ蒲田徳善院玄以と加え。其勢又万有
余人隊伍を列ねて推進させ。佐又内府ハ本陣を北恪ヲ
うつ〳〵ひ二三里ばかりゞ其際ヲ。陣厳〻〻を梅園漫
〻として着る者を。おどろかさぎといふおとホし。且又
各猥運搬の船ハ。百艘の帆を急連ね。南海風波の潮進退
を是合せ。推渡るおと牽も斷らぎ。古の送迎ヲ陸ふて。陸
地を轄る程車ハ。轆〻として遥路ヲ絶ぎ。國〻嬢〻時〻
刻〻の烽逐ハ。おの〻虚実の時号ヲ遠えぎ。おもらの
彼異の密ありること。言伝ともつて演ゞさ〻。茲ヲ亦長号

秋紛文内女輔元親ハ。伝城の防禦と堅固ヲ命ゞ。本國高
して退逗を途中逐く注伸あつて。土列の礼妨おからさ
ゝるねハ心中甚太慌忙き山の内へハ投ぎ去て。直地ヲ
宮知の城ヲ来り。姫令右弟たる弟つ侍ヲ
對面セ〻ゞ軍の評議あり〻るゞ。是迄ヲ大須へ出張し
て。伝親を助くべふゝと決セらゝヲ。際もホく組馬の
注伸飛雲の如く。秀吉数万の勢と率て。此地へ向ふおと
急あり。浮准彼おつて然るべしと。敢ぎるヲ狂もホく生
狗。長岡赤松大谷大軍一地ヲ城下際近く推進さり。大將
元親大ヲ猿き。忙〻く指揮と伝へ。防禦の方紙とさセ。大
息次で又ゞ〻云念の至りあり。高城ゞ〻這態ホきべ

大淀の城へいらみやある。息男が身ふるあるべ。此世ふ
あつて樂ふし。先やお発進名の軍勢を延ちし。息子と
敵れぎんべあるべうぞ。個く続けと狂乱の如く。突立
起るを。姫倉。壁中侍吳編くふ殊止ふし。意をふぐさめ
らるふより。元親ぞづうふ瞋恚を結わ。防禦の方術を
ふやり。晌ふ生施甚だ来つ。長岳与一弟。山内猛右清つ来
松弥三郎。犬谷刑部女婿侍弓知の城の三方より。軍鋒急
ふ攻起る。まつさ東壁遠江守。猶谷内脇正侍ハ甲の浦の
下道ふ蒐り。投寨こと攻紀るふ。上道より城尾帯刀
援ふ揉で攻寄うり。お色らとめふ。四國勢名狼のぐちを
断絶らを。今ハ一日も保ちがたく。お連こと降参しらを

ハ。海又干戈ふ鐵らぞして。土列の東北通路ひらけ。阿波
伊豫讃岐の佐將より。内府の本陣へ仗節を達御出馬の
義を祝しまわうを。強ちどふ加義を計改清正ハ。新溪に
を攻破り。難ふく土列へ乱入しらをべ。國中の騒動おか
らさふうを。宛鼎の沸が如し。這晌ふ當て細川源左来つ
秋爽九名清。久保後河守谷忠名清侍。迎ひふ使者を発走
らせて這相みてい自分の名率。日く赤くふ義失て。殊ふ
名羅の途絶さり。速くも秀吉大軍と率ひ。本國ふ攻入ら
をバ。その危きさつと不下の卵さり。俺們徒ふ此恥を守り
生とも取益ふし。遠地ふ法方の自分を合セ。故ふ通路を
奪ふを。ざるうち。本國土列へ返くべーとて。各自勢を率

陣え。おもきまで持有〻城堡をもて。這途那路ふて一斉ふ
あり。山の内富て近むとおろふ。生駒長吉の一万余斎八
方より発起城中へ投立まゝと。縦横百列ふ吹起る。細川
秋夷谷侑の勇卒死を攻〻てぞ戦ひ乃る。城中こもとを
るよりも。門を開ひて撃て出。自方を助乃て牽入んとも。
長岡忠興おもを看て。欲と通せと指揮〻乃ゑ。生駒勢
も其意と悟り。おの〻中を冗ひさり。四國勢ハ倖侑ふ
りとて。前後を攪〻て城ふいる。長吉与一郎生駒甚右衛
つ。自勢を率俱〻彼卒ふ紛も。苦もふく城中ふ乱投も。敵
ども四國の法軍勢い。唯主人とのゝ看守りて。入城ふの
ゝ心奈ゝ也。猛斗あるふ意も屬乃ゝ城門を開閉と因と

り。法将近ゝ再舎を祝〻。先や進ゝを防ぐんと。其隙紙と
ふさんとゝる時爆〻烈〻ゝる窓おつて。這隅彼隅の陣
厳〻〻。一時ふ煽火燃燃り。秋風ふ誘て燦爛〻乃ゑ。城
名慌周章回るを。得ゝうと長吉生駒の両将速くも面門
と撃破り。赤松大谷を引容〻〻。千頭万尾の分もふさぞ。
無二無三ゝ難続る。ゝ将の細川谷。秋夷此城中ふも怖り
ゝね。再び近名を突破り。山の内の城と棄て。辛くも宮紅
の城ふ逃入。名呂死中の生をよろこび。防禦をもつゝ
ふゝるといゝども。蒼魚庵羊のおもひふ〻。耿〻とゝして
死を待のゝ乃ゝ

内府使元相市正源信親　屬　信親帰服

秀吉公大濱城外ゟ高井樓を構上げ千里鏡を以て城中を沈視ル

己と頼て己ふ亡び。ふふ邦沈で才ふ破らるゝの倫軍こを英雄ふして真の英雄と称べゝるぞや。然べ長芳我が兄親い言智の城ふ對凝守弥三郎信親い大濱ふ宰城をといへども。外ふ邦助る自軍ふし。剏や両城の中途を断をて。ゆと通ざる使冥も得做ぞ。細器ふ樊籠せらをゝる。魚魯ふも狐芳をる身のいうんゞをべき術もいでぞ。將率偕ふ惘然ゝり。浩りゝる所ふ阿瓚を進める上方勢。秀長秀次両卿を紛め。加茂若川。ふ畢川墓田茂峯須賀浮田仙石ふ西一柳脩十二万ふ子孫猪万方の通路を得て。おもひ〳〵ふ土別の地へ。乱入をることゝ嵩堤の溢水を塞得ざるゞ如く。山林若竪す地として上方勢の旗幟懸

の。翻らざる所もふし。今いいろある猛勇博智の長芳我が兄親も。足ゝを動ろをゝと雑ふまゞ。先や元親の居城ある。言ふの城より攻落さんと。隊く伏くを揉出して。日数を分さぞ攻させゝり。晌ふ大濱の大將信親い射撃ふ乞りて故の蹴蹊と案覧ふ。天稍中秋の初ふをゝ。進軍戦を止てより。十四ふ日を経るゝとをゝ。漸く怠る色あゝい也。馬牧炊紲ふどの狡牽い。客ふ酒肉をたゝふむあり。幕足裏ゞて睇もありて。夜い燎をゝ昏暮ゞちあり。信親とくとゝの相を考て。時分ハ来りぬ去来や宵い。夜うちをゝけて故名の。日と覚させんと。二子余人をふ隊よわゝち。編隊ゞ陣へ推進ゝり。さをゝども軍ふをゝる正幻。

ちつとも驚く色なく。又隊の数を固くさゝへて。おを
と防ぐといふといへども。信親ハ大きゝ勇士ハい。馬
場又弟に弟。大多坂国右衛つ。福富隼人同鉄弾守。南岡九
名清。石谷名弥侍。進退寡虚ハ和と是し。四又交接名りる
ちどハ。不得の福富正刑も。あしらひられて敗走しる
と。二陣の加藤左馬助。三陣眼坂中勢。左右一斉ハ推いど
し。福島勢を邪助んとする。信親いまい是までありと。軽
くも自方の勢を纏めて。城中へ退収さり。おを八月十一
日の夜のおとなりし。信親主従三千余人。あんなく城ハ
退入て。いまい数の強弱もあゝらじめ察知せり。おのう
ゑい当初の通路を斬ひらき。父と存亡を共ハせんと。軍

議工夫を凝さを所ハ。父元親ハ志ゞへる。田中九蓋と呼
悄潜の名月年の齢天ハ大漢ある。面門の外ハ志セ来り。
志のび使あるよしと。喘く較じさり。番名おを大将ハ
傳ハて。岡をひらき呼入つ。信親のまへハ伴ふさり。九
造又侍の汗推拭ひ。当初の一城そのはじめい長岡生豹
の数四又ハ検ハ強児の挑合と。てゞろく防禦セしとお
ろへ。豫別の通路開きけるゆえ。加藤ハ早川さやくも迎
投背路より攻登り。接起ること吐鉋の像し。それさへあ
るハ吉川元長。黒田降須賀礼隊ハ。接名くく攻逼らを拒
抗ハ術なく外廓を乗取らを。この九ハ霊ます。今ハ
大将元親公。浮生宮の外他ハなし。脾息継で注伸を減

座の人々おもを驚て。鞠ゐ呆て一句も出ず。新觀合せて
悶然ゝり。信祝忽地憤怒を発し。此上いかゐおろ然止さ
ん城中五十の兵を率連。宮知ゐいゝりて又を帮助ん陣
徇せよとぞ命じゝる。此時内府秀吉公い。大溪宮知の去
城と嚴嚴ゐ捉らおゝ。傍て宮知の元親ハ。外廓と洗ゐ奪
れ也。乙の丸も稍破もんとしつ。危急存亡一嘘の外と出
べゝゝぞ。這図ゐ乗じて豫強く攻ゐび。元秋と抱ぐんお
と容易ゝきども。長号我郎家い天下ゐ切ある奮奈ゐ也
バ。おもを絶さんおと本意ゝあゝゝぞ。剛や又十義德居侍
ゞ。義信のおども奔ゞゝゝゝゝび。浩る逼迫の軍ゐおよび。
更ゐ合戦を止めさセ。元相市正を沛兵ゐ呂さ也。今長号

我郎ゞ進退存亡斯朝ゐ逼りて途を失へり。汝大溪の城
中ゐ到り。まづ信親を説破セしめよ。渠よく帰彼セるも
のゐゝび。其餘の諸將い同意せんおと疑ひゐし。信祝と
もて宮知へ行しめ。又を帰彼ゐさしめゐび難ゝるべき
おとゐゝるべしと。仔細ゐ計義を命所ゝる。且元膜拝ま
ゐゝきるとて陣廠ゐ返て幟徘く准備し。大溪の城へ郎
きゝる。元相その日の折柄ゐハ。南蛮陣の縻索の固夜白
浪沸穿の絞具ゐて。矢筈をおゝる胚甲ゐ。白地の綿の汗
衫製の弘袴を被。十王所の肱甲臑脛赤地綿の戦外套黄
金作の太刀を佩。連浅あしゞの馬ゐまゝゞり。又十余人
の従士を従へ。運ゝ逼くと列歩ゐさしめ。城門近く進ゝ

来り。声々ゝゝゝゝふて曰く。これハ内府秀吉公の家臣
庇桐市正且元使命と称して進超ゝゝ。大将信親ゝ伝説あ
り。速地ゝ城中へ通さるよと。稟容さバ衛卒们次取ゝ彰
と伝へゝるゝゝぞ。信親這晌出軍せんと。准備ゝ迫ぢれゝ
る様舎あるゝ。此河と聆て去ぢ流吟し。法将ゝ向ふて。
秀吉今更庇桐とも て。這城中へ来もおと。甚以て不審去
し。若悪ハ尤も右もまづ必容て意旨を聆然して后ゝゝ
と成さんと。導示ゝし て庇桐と。甲丸の廳ゝ通しゝゝ。此
ハ評定所とゝえて。千丈一面障戸ふく。上座ゝまふけし
将床あり。是ゝ座しゝゝる大将ハ。是弥三帝信親ゝゝ。面
色白く眼光澄で。威風自然と猛ゝゝるゝゝ。市正を近く

招き座を設て来意と問庇桐些も威儀を損さぢ。肩膀を
張て声言く。乃士主君の命を蒙り。此ゝ来るハ長男蒙弟
家の。存亡と説ゝんのゝ他事ゝ。今我演る所と聆て。甚
理の不存ゝ愕ひゝバ。吾や疑やと聆へ去めよ。強て斯ふ
と云稟さゞと。猶セも果ぢ弥三帝噴市正且言あるぞ。君
家の存亡ゝおひて。何ぞ秀吉の指揮を承べき。不礼至極
の稟條発言の理非ゝ困て。汝ゝ者を刎べきあるゝと。眼と
いゝらゝ罵ゝバ。且元顧然とうち笑ひ。斯ハ信親ゝ似気
ゝき命セ。此数中へ使者ゝる者ゝ。命と惜んで来らるべ
きゝ。我説とゝろの是非とも聆ゝぢ。怒発ゝるハ思意線
ふぞ覚ゝゝる。此ゝ長男我弟の存亡と猶ハ是ゝまで智勇

と四國ゝ蟠り。遂ゝ一天下を斬靡けて。技来ゝ武名を輝せんと懐さゝ緯足齒家ざりゝあゝざ。今我國の習ゝ見べ。各偖ゝその意あり。然りといへども甚理と。不理と。且大將の行狀と心の根原とゝさゞ見べ。真の良將といひ謂ゞゝ。足食首將の知る所ゝして。ゝ能行ふ者ゝゝふ。然るゝ此國の佐將ゝおひていは。他とも知らざ自れとも考ゝざ。且ゝ天下の是非とも矣ゼざ。我意放逸ゝして自己を矯ぶり。這効ゝ近んで程遠を取り。家を亡し身を滅し。切多き名を消を。武士の面目と懐さゝ欲。強ゝ〳〵愚將の行と言つべし。甚緣故如何と推て謂バ。内府紀列ゝ出馬の撰舍。後路を斷べき計策も做さば。上

方の虚とも窺ゞたゞ。天下ゝ望を懸るまといは。十分ゝあり といふといへども。緒斗の融徹ざるまと。ゝ十分といふとも可ゝらん。軍法足し〳〵ん後發て発ることもゝく。涯岸嶮岨をよゝ牢固て。國を守得ゝとれもえば。加茂吉川。ゝ早川併ゝ。緣沢を屠取ゝるは。さゝゞゝゝ児のそそふ見ゝ等しく。葛田淀田ゞ贊成と攻見べ。大風茅ゝ万燈の吹墜さゝゝゝ。ゝ吳ゝゝゝ。両々河沢ゝ入時は。蒋氷の日ゝ朝ふゞ如く。大將南海を渡りゝへば。虎ゝ向える羊ゝ似ゝゝ。忽地土疵を卷却せゝゝて。今は全く這一誠ゝ逼着ゝる。對ゝる自方の言知はあゝども。甚ゝゝは攻取ゝて。性甲丸のゝ孤立せり。此期ゝ近で元親の命

数巨石の下の崔卯さゝん。足下武勇ゐ矯奢して。邦今山下ゐ斬て出言知の城の路を開て。父を救出べとて。生と遂べき術ハ絶さり。父と死協ゐ誘ふを。孝義の道とハ謂るまじ。ゑる者の至孝ハ。國家を持ち身を安んじ。先祖を祭てゑ孫を繼系圖を斷ざゝしむるゐあり。今文楯下ゐ及で。孰ゞ命の助るべき。万將苦ゐことを。誅をハ。天下の淀刎ゐんぬべきを。君若寛仁大度ゐして。先祖の功労を懐念を。家名を絶さんおとを。嘆ゑ。且ハ降人ゐ十義兄弟。德居。江村をもじめとして。長考我叔掃部の。嘆ゐ。孤しゑる忠義をあゑ。我を得く思さ。其の理解を聆しめんゝめ。淀使ゝしめゐふあり。彼と此理を舎

得ゝて。土佐一國を領受あり。父元親ゐ説示し。國家を持領天下の補佐とゑたまへ。勲功天地ゐ縣くべし。這言意中ゐ愜ひゐバ。蚤く聆諾ことあゝよ。偽ゐ不存ゐゑゐをぞバ。君首刎て聲憤の。魂をまつりて約るべしと。理死歸ゑ述ゑるゐぞ。汝君の個く息もせぞ。目と目を覩合をゝゑりゐて。酒ゐ醉ゝる如くあり。有係の大將佐親も。忙然として一句もなく。感涙をゝぐめも敢ざりしゲ。大息ゐして泪を拂ひ。又もゝく驚却ゝる市正ゞ言諭。ゝゞ鉄石の心魂と。碎くべきもの外ハあるまじ。今演らをゝる這理の始末一くもつて至極せり。おをゝのゐも祇決より。知ゝざるゐハあゝざをども。唯止おとを

得ざるがゆえに。今日までも足下侍と戦挑ひ研あり。家國に渭べさるべきあり。吾倆父子の命令に決して世に示きものあんぬめりと。朝と覚しき者あるに思ひもよらぬ今の從命是とれもへば秀吉に検に〳〵天下の仁者の一人に國に掲居俺們が勿く迫ぶ研にあるまじ。それに仕ふる豪の侍士。尼相市正が利吉の倅。山とも知らし海とも乾さん。吾心魂誠にもつて屈服せり。子として父の心と斟酌に孝とも渭つべきと。吾今即時に名知元いるり。佐將と猟して父を説べし。もし説得ざんば死を俱にせん。此度の佐將いるにぞやと。汎に佐將何を苦に。御念にまでもいるべき。御父子の身に恙ふ。仁義を

施しにふのみ。土佐一國と安途にさしめ生捕るる掃部頭まで助命しにふ沛料理面目にて最有がさし。從来忠義に戦死せし。金子入る庵の佐勇士も貪是主家をたもたるべ草柴のかげより嬉しみん快く父君と勧めにふて國家の安きにいるさらせにへと。ゑ〳〵ざと共に示まふそ。信親ろされて且元に嚮ひ然ばまより言知にいるり。何分父に利害を説存亡を定めまふたべし。亞ていに掃部頭をそじめ。活捉們を一個も殘らず。這方へ帰しにる條お遠にきやと強て問。且元何と正しふして。武士の演説せし何におひていに。日に冷に変ずるとも。這ゆいろでろお遠あるべきろゑ〳〵ざ心と頓らひ

信親父と
説んと
欲して内
府諸将の
敵陣を穿て
高知
の城へ
赴く

旗奉行陣所

ゐふ亦。御安途あつてさゝやゝゐ。父と謀めゐひねと。まふをゐ信親叩頭ゐし。城ゐ天下をゐろしめを。内府の呂家に相の大器感ずるゐ余りありとて。心中いよ〳〵服ゐし。是より大ゐ酒燕を催し市正を餐応して。送礼ゐつくゞ帰しゐる。に相旦元御本陣ゐ辞返り。城中ゐ彼の始終を。精しく言状してまつまをべ。内府大ゐよろゐおびゐひ。その功労を賞美あり。黄金佐りの太刀と緒り。速地ゐ法陣へ徇らをて。大淀より宮知までの通路をひらき。信親と通さるべし。通しゐらべ素の如く。守衛厳重さるべきよし。命属らをゐるゐより。其方の法将承受さりとて。御淀の如く行ふゝり。遠嗣弥三郎信親い。法将ゐ大淀の城を守らセ。其身ハ自勢百騎ちゝり。率て宮知ゐ向ハる〳〵其路條ある羽柴ゞ彼列厳ゐ去て虚隙ゐく。軌列を整し礼儀を環さず。迎送叩嚀ありをべ。信親いよ〳〵心ゐ感じ。高知の城ゐそ到らをる

絵本豊臣勲功記九編巻之一了